

春燈

6月号
June 2013



主宰の句

安立公彦

唐ももの花散る空や犀星忌

散る桜こころの黙を揺らしつつ

竜天に登り波立つ印旛沼

塚主の目覚め誘ふ堇かな

文机に山吹一枝啄木忌



花あふちあはあはと眼を病めりけり

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

掲出句の前書に「近くに碑文谷池あり」とある。師の散策圏内の公園の森にひと際抽んでている樗の木。句中の「あはあは」の措辞により調べを整へ、そして樗の花への慈愛、右眼黄斑部裂孔を病んでおられた師の晩年の沁み沁みとした心情の吐露とも窺へ哀切を感じる。

我が家の近くの神社にも樗の木があり、晩秋には黄色く熟した実が光沢を放ち、その景も格別なものである。

鈴木 静 恵

うぐひすや半熟玉子匙で割り

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

何と明るい句でしょうか。ご機嫌よく目覚められ、朝日の射し込む部屋で、朝食の半熟玉子の殻を匙でコツコツと叩いて割ると、白身に鮮やかな黄身が透け、先生の温顔も浮かびます。パンにコーヒーマも用意されている。庭の木々の緑に、鶯の初音を聴きながら家族揃って朝の団欒、一日のスタートです。何気ない食事風景にも穏やかな先生のお人柄が滲み出ている思いがします。

菅澤陽子

燈下集



○ 井上春子

鴨引きし水の夕べとなりけり
歳月やきのふのやうに青き踏み
金婚のすみれ一束挿せば足る
うららかなや思ひ出夫とすこしのずれ
その先は曲がりて見えぬ春の道

○ 中野あぐり

塔離る白雲一朵仏生会
牡丹に開けたて重き襖かな
石巻の笹蒲届く春の昼（復興の一助とて）
裳階付け塔のびのびと梅日和
三月の終はる夕空椽にあり

○ 諸戸せつ子

蠟燭のとくる匂ひや鳥臺
早退けの子の抱きもどる子猫かな
亀鳴くや優しすぎるるといふ怖さ
あつはつはうつつふつふ蝌蚪生まれけり
暖かやいま出来ることとしてをれば

太筆と細筆えらぶ光悦忌
春泥に悔やむことのみありにけり
クレマチス切手となりて空を飛ぶ
生きてゐる今を吹きこむしやぼん玉
一本の薔薇の品格身を正す

○ 大嶋 洋子

さまざまな別れありしよ鳥雲に

桜見て決まりし墓所や一周忌

「頬笑み」てふ夫が遺しし椿かな

ふるさとは花散る頃や母の忌来

春の夢亡き人いつも物言はず

○ 太田 具隆

風を呼ぶ枝垂れ桜となりにけり

亡妻に誘はれて視る桜かな

石ひとつ組み直したる花吹雪

もうひとつ石を添へたる花の午後

なかなか散るを急がぬ桜あり

○ 西谷 良樹

吊し雛海の静かな日なりけり

初蝶を胸元に抱き車椅子

囀ののぼりつめてはこぼれけり

子と孫を祝ふ渡航や黄水仙

夕桜カレーのほひ流れきし

○ 綱 徳女

鳥帰るゆふべ竹林揺れやまず

治癒の日を天にまかせて花愛づる

花の径僧にゆづりて合掌す

追懐にひたる夕べや花の翳

百日忌明日に蛸蚪の紐長し

○ 末吉 治子

亡き母に尽くす氣に咲く八重桜

父母共に話題の桜咲きにけり

病室に特級便の桜かな

夜桜の宴を締むる校歌かな

ベランダ四月午後の紅茶の生まれり

○ 滝沢 幸助

四月なほ雪消え残る村に老ゆ

百姓一揆の昔を今に残ン雪

享保の苛政そのままの雪残りけり

くだかけは鶏の古名漸く春

鶏啼かず児らの声なく雪消えず

当月集

安立 公彦選



○ 神田 恵琳

千本ざくら訪ふ歌びとの影追うて

法螺貝のゆるく身を透く飛花落花

杖惑ふ真珠光なす春の泥

己が身は楽器の一つ春歌ふ

業平橋菜の花化して蝶となる

○ 小山 繁子

かたくりの花や風呼ぶ奥武蔵

春暁や鳥語みなぎる向う山

暮れかねてゐる村白の白木蓮

宵親し真砂女詠みたる紫木蓮

山笑ふ郷に光と人の声

○ 海村 禮子

涅槃会や咽の奥みせ猫あくび

朝風に揺るるさくらの花重し

しばらくは埴輪と語る山桜(房総風土記の丘二句)

白き舟ふたつ浮かべて春惜しむ

春暁やかがみのやうな汀道

○ 物江 康平

春雪嶺無神論者を仰がしむ

山笑ふ肌の柔らに触れみたき

卒寿へと生くる証の霞食ふ

猪豚となりて春耕原発地

牛の声麦三寸を渡りゆく

○ 齋藤 晴夫

青磁色に里山の明け桜どき

花十日卒寿の齡重ねけり

鎮もりて月の桜となりにけり

降る雨の音にはならず花散らす

花吹雪又三郎は風に乗り

春燈の句

安立 公彦選

今生を語り掛けつつ雛飾る

拙なくも転結引きて初音かな

婚活や誰か野焼の香を纏ひ

花糍挿されて匂ふ東司かな

かたかごの耳傾くる風の音

朝よりの雨上がりけり夕棧

地の菜に地の酒を酌む花蓆

眠りつくまなうら花をとどめしまま

桜咲く友の宴の祝酒

浅草の句碑健在や傘雨の忌

下町の塔を見上げて花や散る

別れあり出会ひもありて卒業期

春宵や一中節の江戸の空

成駒屋の至芸眼裏梅若忌

三重 上野 進

長野 藤丸 誠旨

東京 鈴木としお

(久保田万太郎没後五十年)

神奈川 犬嶋テル子

花散るや港の見える丘の歌碑

ふらここの父と子の声日暮呼ぶ

早梅の風にさそはれ白寿かな

青き空出窓に春の花開く

落椿清むる庭に紅とどめ

寒暖の差のはげしさや春浅し

墨の香や初音かすかに朝稽古

糸桜風に遊ばれ枝垂れけり

春障子内緒話を楽しめり

母よりの春ショールかけ街中へ

ふる里や潮の香深く落椿

朧月夜病衣の袖に風少し

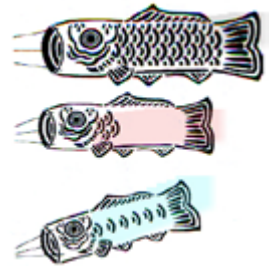
春深しハーモニカ吹く男の背

夕なつむ窓の下まで青葉潮

埼玉 原田たづゑ

千葉 大湊 栄子

千葉 鶴岡 紀代



余言

安立公彦

てふてふが入り膨らむ遊戯の輪 片桐てい女

幼稚園の園児らの遊戯の輪。どの子も大きく口を開いて唄っている。手拍子をうちながらそういう園児らを見守っている若い女の先生。その上には桜が一面に花ひらいている。春の光をあびて、どの子も健康そうだ。

と、その輪に一匹の蝶が舞い込んで来た。園児らは一斉にその蝶を見る。蝶の舞いにつれて遊戯の輪はつづらに動く。それはいかにも園児らの輪がふくらんでいるかの様に見えるのだ。作者も、この句を見る私たちも、ひととき童心に返り幼い子らと思いを一つにするのだった。

花の昼うしろに誰かゐるやうな 植田 利一

今年の桜は花時を前倒しにするように花ひらき、そして

散っていった。折からの風の中、桜吹雪につつまれた人も多かっただろう。あの淡紅色の花びらの散るのを見てみると、妖艶、清雅ともごもの思いがわが身をつつむ。

掲出句。爛漫と咲く桜を前にした作者。いつしか花に心をうばわれ、それは恰も花の精がわが身のうしろに付いているかのような思いだ。作者はそれを「うしろに誰かゐるやうな」と表現する。「花の昼」とのみことな照応だ。

和昭忌の過ぎて淡海や遠霞 和田 孝村

中島和昭さんが逝かれたのは、平成二十二年二月二十四日だった。享年八十二歳。その日から早や三年の歳月が流れた。その間作者は折にふれて和昭さんを詠んでいる。

この句。和昭忌も過ぎた三月、琵琶湖畔に立つ作者の姿が見えてくる。琵琶湖は一年前の三月末に関西大会が催された地。坂本の会場は参加者六十三名の熱気に包まれていた。会の世話役だった作者はそういうことなど思い出し、その思いはいつしか和昭さんの上に至る。

眼前の淡海は一面に霞がかかっている。霞という仄かな微かな有り無しの現象の先に、今年の和昭忌も過ぎたという思いが湧いてくるのだった。作者はこのところ体調をくずさされていると聞く。ご快癒を祈るばかりだ。

秩父嶺に雲厚き日や菊根分 鈴木 静恵

遠山に流るる雲や春田打つ

尾野奈津子

前句。菊を育てるといふことは、一年を菊に奉仕することだ、と以前聞いたことがあった。それだけ菊は人びとの生活の中に馴染んでいる。菊の種類、その觀賞法、用途、どれを見てもこれだけ多彩な花は類を見ない。菊人形などその最たるものだ。

この句は「菊根分」。菊を育てる人にとつては最も大事な作業である。それを「秩父嶺に雲厚き日」とする。一本には、それは清明から穀雨までの作業とある。「秩父」という固有名詞も良く効いている。

後句。三月の本部句会で特々選に頂いた。田打、畑打、耕しなどの季題は、多くの生活の季語の中でも、とり分け重要なものとされて来た。降雪地域では、山脈に浮かび上がる残雪の形から農耕の日程を決めるといふことから見ても、その重要さが分る。

この句、「遠山に流るる雲」でその地の背景が読みとれる。それらの遠山の中には、まだ雪の残っている山もある。農家にとつては「春田打つ」は喜びでもある。一年の農作業のスタートだ。それをこの上五中七が良く語っている。何よりも生活感のある言葉が良い。

午後の日のおくらんでくる春障子 佐橋 敏子

改めて「春障子」と言う季語を見ると味わいの深さが納得される。この句三月の本部句会で特選に頂いた。「春障子」にさす日差しの柔らかさまで感じられる。「午後の日のおくらんでくる」が絶妙だ。和室の造りも、作者の居る位置も、この十二字の中に文字通りふくらんで見える。

皇后の小さく手を振りあたたかし 大文字孝一

東日本大震災から二年の歳月が過ぎたが、未だに仮設住宅に住む被災者は多い。国を挙げての復興も、山積する問題の前に遅々として進まない。この句、そういう被災地に、天皇皇后のみゆきがあつた折の一景。皇后の振る手の先には、老いた羅災の人たちが並んでいる。頭を下げている人、手にした日の丸の旗を振る人、中には笑む人も居よう。しかしそういう姿は、一様に心あたたかなものとして映る。「小さく」が効果的だ。

千本ざくら訪ふ歌びとの影追うて 神田 恵琳

吉野での作。山裾から下の千本、中の千本、上の千本、奥の千本と、その美称は史実とともにある。「歌びと」はもとより西行、そして芭蕉。〈吉野山こずゑの花を見し日より心は身にもそはずなりにき 西行〉、〈命二つの中に生たる桜哉 芭蕉〉。作者は今その影を追つて吉野をあるく。この句もそして作者の行動力も、ともにみごとだ。